

## 第三十章 二人の女帝

鯛ペい駅に到着すると音楽隊がイリ王国の国歌を演奏する。そして鯛湾総統が出迎える。おかつぱ頭で軍服を着ている。軍服と言っても勳章や派手なバッチは一切ない一兵卒が着用するもので、とても総統には見えない中年の女性だ。イリもノーメイクで地味だがそれ以上に質素だ。

女同士だからか初対面とは思えないほど二人は打ち解ける。しばらくすると総統の後ろに数十人の女性が整列する。特急ウク・ライナーからグレーデッドの残党が降り立つ。次の瞬間歓声を上げて抱き合う。新疆ウイルス自治領で潜伏していたグレーデッドの残党とその昔鯛湾に渡った残党が一堂に会すことになった。

鯛湾の残党は鯛湾の経済発展を先導した。しかし、そのノウハウは大陸の新疆ウイルス自治領の残党がもたらしたものだ。アイディアや設計はウイルス自治領の残党が考え鯛湾の残党が完成させた。

今ここでグレーデッドの残党は一つになった。ついに流浪の旅に終止符が打たれた。これから彼らの科学力が世界の平和に貢献することになるかもしれない。彼らの表情は自信にみなぎっている。

大統領府で昼食会が開催される。中央には二人の女帝、イリ女王と鯛湾総統が笑顔でグラスを持ち上げる。

\*

「乾杯！」

拍手が広がる。イリがマイクに向かってにこやかに声を上げる。

「まずは鯛湾総統にお礼を申し上げます」

総統が会釈で応える。イリが視線を総統から会場全体に向ける。

「地球に残ったグレーデッドの皆様には苦労をおかけしました」

すぐに反応が戻ってくる。それは失礼とかというレベルではない大きな声だった。

「ノロはどうした！」

イリはひるむことなくその声に向かう。

「第二の地球を発見してそこで暮らしています。元グレーデッドの大総統として皆さん全員と宇宙に旅だちたかったのですが……」

イリの言葉が遮られる。

「良かった。さすがノロだ」

イリは地球に残ったグレーデッドの残党が自分やノロに裏切られたと知っているのではないかと懸念していた。しかし、海上には「良かった、良かった」と言う女性の声が沸き起こる。

「ノロより大統領だったイリ王女の努力の賜だわ」

女性の残党が腕を組む男性に同意を求める。いつまでも拍手が続き歓声が止まらない。

\*

やがて空気の温度が少し下がると鯛湾大統領が両腕を上げて万歳ポーズを取る。再び盛り上がるが両腕を下げるとぐるっと周りを見渡してからマイクを握る。

「ノロは全人類が自然を大事にして平和に暮らせるようにしてくれました」

一瞬、拍手がわくが大統領の視線が厳しくなったのを誰もが察知すると静かになる。

「しかし、私たちは再び平和をないがしろにするようになって自然の摂理に背を向けるようになりました」

大統領の言葉に全員が耳を傾ける。グレーデッドの残党だけではない。この集会に居合わせた鯛湾人はもちろん中国人や外国人も次の言葉を注視する。

「ノロは原発を廃炉にして核兵器を大幅に削減した。しかし、新たに原発が建設されて核兵器が際限なく製造された。ノロの遺産を食い潰したのです」

肯定とか否定の問題ではなく現実の確認を促した演説に誰もが沈黙で応えた。

「あえて言う必要はありませんが、今ウクライナー共和国がソシアの猛攻を受けています。そしてこの鯛湾も連日、中華民国の脅しを受けています」

中華民国とは海を隔ててわずか百キロメートルしか離れていない。小さな島国に過ぎない鯛

湾島を数週間にわたって中華民国軍の戦闘機、爆撃機、巡洋艦、駆逐艦が訓練と称して威嚇していた。戦闘機ならわずか数分で鯛湾に到着する。

「でも安心ください。本来ならば必要ないのですが、有効な対抗手段を持っています」

\*

全員、ホームから駅前の広場に移動する。総統は平凡な中年女性に見えるが芯は鉄のように硬く決して曲がることはないような真正銘の鉄のような女だった。イリとは違ってぐいぐいと人を引きつける魔法を持っていた。この二人の女帝が力を合わせるとどうなるのか。見物だ。

広場が騒然とする。戦車が現れたのだ。その姿を見てイリが驚く。

「イエロー・タイガー！ どうしてここに！」

総統は集まった国民はともかくイリの驚きの方向が違うことに逆に驚く。

「女王はご存じだったのですか」

「もちろん！ ウクライナー共和国の窮地を救ったのがこの戦車、いえ他にも……」

さらに総統が驚く。

「ソシア軍の猛攻を最新鋭の戦車で防いだと聞いていましたが同じ戦車だったのですか」

「イエロー・タイガー、コバルト・カウ、レッド・エレファント、ハリー・マウスの四種類の戦車が状況に応じてソシア軍の攻撃を阻止しました。もう何が何だか分からなくなったわ。いずれにしてもグレーデッドの残党が造ったんですね」

この戦車があれば中華民国軍が鯛湾に上陸しても歯が立たないだろう。しかし、その前に空母や巡洋艦の攻撃を防がなければならぬ。ウクライナー共和国での戦闘は陸上戦だった。だから戦車が幅をきかせた。ソシアのブラックシー艦隊との戦闘では海獣パンダが活躍した。しかし、鯛湾海峡での中華民国軍の艦船はブラックシー艦隊とは数が違うし空母を主力とした大艦隊だ。パンダでは無理とイリは考えた。

イリの助言に鯛湾総統が余裕をもって答える。

「海獣パンダ。もちろん我が海軍にも配属されています。高速潜水艦オルカのことですね」

イリが驚く。ブラックシーでソシア海軍を全滅させたオルカが生き物ではなく潜水艦だと分かったからだ。総統は自信ありげに続ける。

「オルカの背びれより数倍も強力な腕力を持つ戦闘潜水艦ザットンを提供しました。もちろんオルカもザットンもグレーデッドの構成員が鯛湾で製造したものです」

「やっぱり！　ところで『ザットン』というのは？」

中華民国は安い労働力を背景に先進国を追い越して長きにわたり世界の工場の座に君臨していた。ところがいつの間にか鯛湾が世界の精密工場となった。中華民国ですら鯛湾の先端技術力にはかなわない。たとえば鯛湾製の高性能半導体があれば中華民国の製造業は立ち行かなくなつた。今や鯛湾は世界の精密工場。だから中華民国は力尽くでも併合したかった。要はグレーデッドのノウハウを奪いたかった。

グレーデッドの元構成員たちは戦争に加担したくなかったが、大国が力任せに小国を迫害したり支配したりすることには反対だった。ただし自分たちの存在を表に出したくはなかった。元は列強各国が中華民国の前の王朝であった中華清国への列強各国の植民地政策を目の当たりにした各国大使たちのうち良心が許さなかった人々が母国の指示を無視して秘密裏に手を携えて結成されたのがグレーデッドだった。その趣旨に賛同した科学者たちが集まって独裁国家や帝国主義国家を懲らしめるために戦意を失うような武器を密かに造っていた。

ところが第二次世界大戦が終結して数十年経ったとき、身から出たさびではないが内部からヒットラーのような人間が現れた。力尽くで世界を統一ないと平和は訪れないと考えたのだった。大總統と名乗って核兵器で世界を恐怖に陥れた。

この詭弁に挑んだわけではなかったが、ノロが大總統を打ち破ってイリが大總統に就任してグレーデッド本来の平和主義を復活させた。しかし、ノロは欲がない興味本位の科学者だったのでつまらない地球に見切りをつけてグレーデッドの構成員と共に宇宙に旅だった。

全員がノロについて地球を離れたのではなかった。信念を持ち続けることを由とした残された構成員は大国や独裁国家に加担することなく平和な地球建設に意欲を燃やした。このようにある意味グレーデッドは空中分解したが、まず大国に理不尽な攻撃を受ける小国を支援する。今回元グレーデッドの大總統だったイリ女王、鯛湾総統の女帝が協約を結んだのはむしろ当然

\*

の結果だろう。

\*

繰り返しになるが、元々グレーデッドは平和を願う集団だったがある代の大総統が方針転換して核兵器で世界を征服しようとした。そのグレーデッドの大総統をノロが倒した。イリが大総統となってノロがグレーデッドの科学力を使いこなして争いのない世界へと導いた。ところが人類はノロにわがままな要求を求めるが、お互い仲良くしたりすることはしない。それどころか争いが絶えない。そんな人類を見限ってノロはイリとともに第二の地球探索に旅立つ。そのとき大総統イリに行動をともしにするグレーデッドの構成員と地球を何とかしたいと願う構成員とに分かれた。仲違いではなかったが、それぞれ別の道を歩むことになった。

グレーデッドの構成員は様々な人種からなるが、中国が発祥地だから中国人とその周辺地域の人種が多かった。その一つがウイルス族であったり鯛湾族だった。いずれも中華明国から圧力を受けていた。優れた科学力を持っているが幽閉されたり迫害されたりして能力を生かせなかった。しかも主力メンバーが新疆ウイルス自治領と鯛湾に分断されていて両方とも中華明国の支配下、あるいはそれに近い状況だった。

そこを鯛湾の総統が結びつけた。ウイルス族に紛れたグレーデッドの構成員の設計した武器を鯛湾族に紛れた構成員に製造させることに成功した。

\*

広場が騒然とする。戦車が現れたのだ。その姿を見てイリが驚く。

「イエロー・タイガー！ どうしてここに！」

総統は集まった国民はともかくイリの驚きの方向が違うことに逆に驚く。

「女王はご存じだったのですか」

「もちろん！ ウクライナー共和国の窮地を救ったのがこの戦車、いえ他にも……」

さらに総統が驚く。

「ソシア軍の猛攻を最新鋭の戦車で防いだと聞いていましたが同じ戦車だったのですか」

「イエロー・タイガー、コバルト・カウ、レッド・エレファント、ハリー・マウスの四種類の戦車が状況に応じてソシア軍の攻撃を阻止しました。もう何が何だか分からなくなりましたわ。いずれにしてもグレーデッドの残党が造ったんですね」

この戦車があれば中華明国軍が鯛湾に上陸しても歯が立たない。しかし、その前に空母や巡洋艦の攻撃を防がなければならぬ。ヨーロッパは地続きなのでウクライナー共和国での戦争は陸上戦になる。だから戦車が幅をきかせた。ソシアのブラックシー艦隊との戦闘では海獣パングが活躍した。しかし、鯛湾海峡での中華明国軍の艦船はブラックシー艦隊とは数が違うし空母を主力とした大艦隊だ。パングでは無理だとイリは考えた。

イリの助言に鯛湾総統が余裕をもって答える。

「海獣パング。もちろん我が海軍も配備しています。高速潜水戦闘艦オルカのことですね」



イリが驚く。ブラックシーでソシア海軍を全滅させたオルカが生き物ではなく潜水艦だと分かったからだ。総統が自信ありげに続ける。

「オルカの背びれより数倍も強力な腕力を持つ戦闘潜水艦ザットンも配備しました。もちろんオルカもザットンもグレーデッドの構成員が鯛湾で製造したものです」

「やっぱり！ とところで『ザットン』というのは？」

中華民国は安い労働力を背景に先進国を追い越して長きにわたり世界の工場の座に君臨していた。ところがいつの間にか鯛湾が世界の精密工場となった。中華民国ですら鯛湾の先端技術にはかなわない。たとえば鯛湾製の高性能半導体があれば中華民国の製造業は立ち行かない。今や鯛湾は世界の精密工場。だから中華民国は力尽くでも併合しなかった。要はグレーデッドのノウハウを奪いたかった。

\*

グレーデッドの元構成員たちは戦争に加担しなくなかったが、大国が力任せに小国を迫害したり支配したりすることには反対だった。ただし自分たちの存在を表に出したくはなかった。元は列強各国が中華民国の前の王朝中華清国への列強各国の植民地政策を目的にした各国大使たち母国の指示を無視して秘密裏に手を携えて結成されたのがグレーデッドだった。その趣旨に賛同した科学者たちが集まって独裁国家や帝国主義国家を懲らしめるために戦意を失うような武器を密かに造っていた。

ところが第二次世界大戦が終結して数十年経ったとき、身から出たさびかも知れないが内部からヒットラーのような人間が現れた。力尽くで世界を統一しなければ平和は訪れないと考えたのだった。大總統と名乗って核兵器で世界を恐怖に陥れた。

この詭弁に挑んだノロが大總統を打ち破って、イリが大總統に就任してグレーデッド本来の平和主義を復活させた。しかし、ノロは欲のない興味本位の科学者だったので、つまらない地球を見切りをつけてグレーデッドの構成員と共に宇宙に旅だった。

全員がノロについて地球を離れたのではなかった。信念を持ち続けることを由とした残された構成員は大国や独裁国家に加担することなく平和な地球建設に意欲を燃やした。ある意味グレーデッドは空中分解したが、まず大国に理不尽な攻撃を受ける小国を支援する。今回元グレーデッドの大總統だったイリ女王、鯛湾總統の女帝が協約を結んだのはむしろ当然の結果だろう。